

## 巴金『家』論——鳴鳳の物語——

河村昌子

### はじめに

いわゆるベストセラーという現象を、時流に乗って同時代人の感性をつかんで爆発的に売れる（時流型ベストセラー）と、時代を経ても変わらずに人々に愛される（超時流型ベストセラー）とに分けるとすれば、巴金の『家』<sup>(1)</sup>は今や明らかに後者に属している。巴金の小説が次第に歴史上の存在になってゆく中で、『激流』三部作だけは依然として好んで読まれているという<sup>(2)</sup>。その人気の秘密のひとつには、『家』が本来は新聞連載小説であったことにふさわしく、多くの山場を折り込んだ巧みなストーリー展開をしていることがあるだろう。覚新の悲恋、その妻の悲惨な死、覚民の婚約拒否、覚慧の家出等々大きな事件が盛り沢山であるが、中でも覚慧と小間使い鳴鳳との恋愛と、鳴鳳の自殺は、重要なクライマックスである。例えば夏志清が「鳴鳳の死は多くのセンセメンタリストにとって現代中国文学で最も魅力のある場面である。」<sup>(3)</sup>と言い、飯塚朗が「『家』に登場する女性は多いが、一番余韻の残る女性は鳴鳳のような気がする。」<sup>(4)</sup>と語るように、鳴鳳という少女と彼女の死に、『家』を読んで最も心を揺り動かされた読者は数多いのではないだろうか。

しかしこのような漠然とした読者の印象というレベルを離れて、批評のレベルに於ける鳴鳳を見てみると、覚慧の自由恋愛の相手として、或いは犠牲者の一人として、簡単な脇役として扱われる場合が少なくなく、正面から彼女自身を論じる場合にも、決まってあるステレオタイプとして語られている。「もう少しましな人間らしい生活を手に入りたい、少しでも独立自由の人権が、美しいものを愛する権利が欲しいという鳴鳳の不満は、この暗黒の墓場ではそれ自体が分に安んじない反逆の思想である。このような思想は無自覚のはっきりしないものだが……」<sup>(5)</sup>「彼女の入水自殺は、完全に絶望してしまった時でも彼らが精神的には永遠に彼女を征服できないことを示している。彼女の自殺は彼女を搾取し圧迫する制度に対する彼女の抗議である。」<sup>(6)</sup>といった言葉に見られるように、鳴鳳の自殺を封建制度への抗議として読み、『家』に於ける鳴鳳の意義を〈封建制度への反逆の象徴〉と見なすのである。『家』の時代設定が一九二〇年であることを重視し、言わば同時代人として『家』を読めば、当然このような解釈に帰結するのだから、今日的に見れば、鳴鳳という形象そのものの魅力を探る余地があるように思われる。

オルガ・ラング (Olga Lang) は『巴金とその著作』で、「巴金は、登場人物を描き始める時いつも、ある特定的人物を思い浮べ(中略)、その人の性格を登場人物におおざっぱに貸し与える。(中略)しかしこれら現実の生活からの印象は、単に記述されているだけではなく、芸術的な真実へと創造的に変形されているのである。」<sup>(7)</sup>と述べている。鳴鳳のモデルについて巴金は、「私たちの所には翠鳳という名の小間使いが居たが、彼女について私には何の記憶もない。ただひとつだけ覚えてるのは、彼女を妾にしたいという遠い親戚があったのだが彼女は断固拒否したということである。彼女は坊っちゃん方の誰かを愛したなどということはなかったが、後に貧しい男性に望んで嫁いだ。」<sup>(8)</sup>と語っており、鳴鳳はラングの言う「芸術的な真実への創造的な変形」の要素を多分に持つ、創作された登場人物であることが分かる。言うなれば鳴鳳には、他の登場人物以上に巴金の作家としての技艺が込められているのである。そ

の意味でも鳴鳳という形象そのものを検討することは無意味ではないだろう。

本稿は、鳴鳳を「封建制度への反逆の象徴」とする読み方からは少し離れ、鳴鳳自身がどういう人物であって、彼女の自殺は彼女自身にとってどういう意味を持つのかを考察することを目的とする。テキストには、七八回の大篇幅書き換え<sup>(9)</sup>を経た後の定稿である、巴金全集1（人民文学出版社 一九八六年）を用いる。以下引用文の頁数等全て全集に拠る。

### 一 鳴鳳の人物像、及び、鳴鳳にとっての覚慧

まず鳴鳳の人物像の基本要素だが、次に挙げる鳴鳳が運命について思いを巡らせる場面に明らかである。

涙を流し虐待を受けることはすでに彼女の平凡な生活の特徴になっていた。これは避けられないことだと彼女は思っていた。自分でそう望んでいる訳ではないが、そうなったら受け入れるより仕方ない。世の中のこと一切は全知全能の神が配し給うたのだ、自分がこんな境遇にあるのも運命が定めたことなのだ、と彼女は思う。これが彼女の単純な信仰であり、他人が彼女に語るのもそんなところだった。（第四章、二四頁）

彼女がお仕えしているお嬢さま方が享受しているような、精巧できれいなおもちゃ、華やかな服、おいしい食べ物飲み物や暖かい布団を、彼女も夢みたことがあった。（同前、二五頁）

「運命だわ。全部運命に定められているんだわ。」虐待を受ける時などことに、こういう言葉で自分を慰める。又こうも思う。「もしも私の運命がお嬢さま方のように良かったら。」そして幻想に溺れ、自分が綺麗な服を着て、父母の寵愛を受け、坊っちゃん方に崇拜されるのを想像する。やがて素敵な坊っちゃんまが現れて彼女を貰い受けて連れてゆき、彼女は彼の家で幸せな生活を送るのだ。「あるはずもないことだわ。本当に馬鹿げた考え。」自分

を責めるように彼女は微笑む。(同前、二五・二六頁)

鳴鳳は自分の惨めな境遇を運命によるものでどうすることもできないと諦めている。しかしお嬢さまのようであればという気持ちを押しさえ込むことはできず、自分をこんな境遇から脱却させ、お嬢さまのような幸福をもたらしてくれる素敵な坊っちゃんか現れないかと期待している。鳴鳳とは、一方で不幸を運命だとして諦めながら、もう一方ではお嬢さまに憧れ、お嬢さまのような幸福をもたらしてくれる素敵な坊っちゃん、言わば「白馬の王子様」という〈救い主〉の到来を夢みる少女なのである。

次に、鳴鳳にとって覚慧とはどういう存在なのかを検証する。

突然ある若い男の顔が眼前に現れた。彼は彼女に向かって笑っているようだった。彼女には彼が誰なのか分かった。彼女の心はすぐに明るくなった。一縷の望みが彼女の心を暖めた。彼女は彼が自分に向かって手を差し延べてくれることを願った。彼なら自分をこんな生活から救い出してくれるかもしれないと思った。しかしその人の顔はだんだんと空高く上ってゆき、ますます高くなって、やがて見えなくなった。彼女は夢見心地で塵にまみれた天井を眺めていた。(第四章、二七頁)

最近よく夢を見るんです。いつも貴方の夢を見るんです。一度こんな夢を見ました。私は奥深い山に居て、一群れの狼が後ろから追って来るんです。今にも追いつかれそうだったので、ふいに山合いから一人の人が駆け出してきて狼を退治してくれました。よく見てみたら、それは貴方だったのですよ。貴方は私がいとも貴方を救い主だと思っていることをご存知ないでしょう？(第十章、八六・八七頁)

私が貴方を見ているとどんなに嬉しいか、貴方はご存知ないでしょうね。貴方がお側にいらっしやるだけで私は安心するんです。……私がどんなに貴方を尊敬しているか貴方はお分かりにならないでしょうね……ある時は貴

方は空のお月さまそっくりで……私の手には届かないことは分かっているんです。(同前、八七頁)

彼女は時には、彼がいつの日か彼女を救い出し、彼女を泥沼から救い出すことができるようにと期待し、祈りもしていた。(第二十五章、一三五頁)

これらの描写からは、鳴鳳が覚慧を不幸な境遇から彼女を救い出してくれる〈救い主〉と見なしていることが分かる。「空高く上ってゆく」という表現や月の喩えに見られるように、鳴鳳は覚慧を手の届かない存在だと考えているが、むしろその故に彼女にとっては、覚慧を別世界から他者として救いの手を差し延べる存在である〈救い主〉に結びつけることが容易になる。鳴鳳のこの態度は、彼女が馮楽山の妾に決まったと宣告された時にも変わらない。

中庭は真っ暗だった。鳴鳳には人影ひとつ見えなかった。淡い光が覚慧の部屋からもれ出ていた。彼女は女中部屋に戻って寝るつもりだったのだが、この光に誘われてそうと覚慧の部屋の窓の下まで来た。三つの窓ガラスはみな白い紗の帳に遮られ、光が小さな穴からもれ出ており、地面に美しい模様を描いていた。(中略)彼女は窓に近寄り首を伸ばして中を覗こうとした、しかし窓はやや高く頭は届かなかった。二三回試したもののためだったので、彼女は絶望して数歩後ろへ下がった。(第二十六章、二五三・二五四頁)

覚慧の部屋が光や美しい模様で描写される一方で、鳴鳳は窓ガラス、帳、窓の高さに阻まれて中を覗くことすらできない。鳴鳳にとって覚慧が彼女を救ってくれるかもしれない素晴らしい存在であると同時に、彼女には手の届かない遠い存在であることを、象徴的に表す場面である。

鳴鳳にとって覚慧は〈救い主〉である。しかし又この〈救い主〉は彼女には絶望的に遠い存在である。しかも〈救い主〉に対して〈救われる存在〉である彼女は、徹底しておとなしく救いを待つ受け身の立場にある。

## 二 覚慧と鳴鳳の恋愛に於ける新しさ

張競氏の『恋の中国文明史』<sup>(10)</sup>によれば、『紅樓夢』の賈宝玉と林黛玉の恋愛は、それ以前の才子佳人小説の恋愛と次の三点で大きく異なるという。まず、才子佳人小説では「偶然の出会いでの一目惚れ、詩文の交換、逢い引きはほぼきまりきった『三部曲』で、その過程で侍女など第三者による媒介は絶対欠かせないものであった」のに対し、『紅樓夢』の二人の恋は、第三者の手助けを必要とせず、未婚の男女でありながら同じ邸宅に住み、毎日顔を合わせるという「自然なつきあいのなかに発生し、時間の経過とともに発展する」という恋であること。次に、二人の直接的で親密な交際にもかかわらず、二人の恋からは「かつての才子佳人小説にあるような、早過ぎた性交渉が完全に排除され」ていること。そして、恋の目的が「恋人を占有すること」ではなく「恋人に向ける情そのもの」にあり、「恋を自己の内面において完結させようとする認識」が芽生えていることである。

『家』は『紅樓夢』の影響を大きく受けていると一般に考えられているが、<sup>(11)</sup>上記二つのポイントに従って『家』を見直すと、覚慧と鳴鳳、覚新と梅、覚民と琴、いずれの恋愛も『紅樓夢』の延長線上にあると言えるだろう。『紅樓夢』から百年余りの時を経て『家』が書かれた訳だが、当時すでに丁玲の『莎菲女士の日記』(一九二八年)や茅盾の『蝕』三部作(一九三〇年)のような、『紅樓夢』より数段新しい恋愛を描いた作品が発表されていたことを考えると、覚慧らの恋愛はやや古風な感のあることは否めない。しかし近代小説『家』に見られる恋愛は、やはり単なる『紅樓夢』式恋愛パターンのバリエーションではない。覚慧と鳴鳳の恋愛にも当然ある新しさを見出だすことができる。

まず第一は、覚慧がごく気軽に鳴鳳との対等で公にできる恋愛を望んでいることである。

(もし自分に嫁入りの話があったらと問う鳴鳳に対して)「僕に方法があるよ。奥様に僕の言うようにしてくれと頼む

よ。君を僕の正妻に迎えたいと奥様に言うよ……」彼の言葉は確かに真心から出たものだったが、この時彼は自分の立場をよく考えていた訳ではなかった。(第十章、八六頁)

大丈夫だよ。今はまだ僕たちは二人とも若い。将来その時が来たら、僕は必ず奥様に(鳴鳳を正妻にしたいと言うよ。きつとなんとかする。絶対に君を騙したりしないよ。(同前))

「僕は普通の人間にすぎないんだ。君と同じ人間なんだ。僕は将来きつと君をお嫁さんにするよ。」彼の声は震え、涙が流れた。(同前、八八頁)

彼女は俯いて小さく言った、「私とても怖いんです……奥様方に(自分と覚慧の親密な関係を)知られてしまうのではないかと。」僕はとても感動して、彼女の顔に手をやり微笑んで首を振った。「怖がるんじゃないよ。何も恥ずかしいことではないんだ。愛情は汚れないものなんだよ。」(第十一章、九五頁)

覚慧のこのように楽観的な態度とは裏腹に、鳴鳳はこの恋愛に対して慎重である。

私はただ貴方が私を追い出したりさえしないでくださればいいんです。私は一生お館で貴方にお仕えして、貴方の小間使いとして、いつもお側に居たいんです。(第十章、八七頁)

「三少爺、どうか今後そんなことはおっしゃらないで下さい。」鳴鳳は慌てて覚慧の言葉を遮った。「どうして貴方はいつもお嫁さんにするのしないのなんてことを言おうとなさるのですか。私が一生貴方の小間使いでいればいいではないですか。そうすれば奥様もお怒りにならないし、貴方も人の感情を害さなくて済むんです。私は一生貴方のお側に居られさえすれば満足なんです。私少し怖いわ、良すぎる夢を見ていると長続きしない気がします。」(同前、八八頁)

彼女の生活はもう以前のように苦しくなくなった。主人たちは少し穏やかになったし、汚れない愛情が

彼女を奮い立たせ、美しい幻想を抱かせ、現実の一切を忘れさせてくれた。しかし彼女はいつもとても謙虚であり、幻想の中にあっても、それ程大胆ではなかった。彼と同じ場所で平等に暮らすことなど考えつきもせず、ただ彼の忠実な奴隷に、彼一人だけの奴隷になりたいと思っていた。(第二十五章、二三五頁)

鳴鳳の「貴方に一生お仕えしたい。」という言葉は、賈宝玉の侍女襲人の宝玉に対する態度を彷彿させる。<sup>(12)</sup>しかし宝玉と違って覚慧が、鳴鳳を正妻に迎えたいと考えている、言い換えれば妾にする可能性を考えない主人である以上、襲人のように自分の若主人の妾となって一生仕えることを夢みてその為のステップを確実に踏んでゆくことは、鳴鳳には許されていない。勢い鳴鳳の「一生お側に」という気持ちは、彼女が慎重にそれを奴隷としての主人への愛情にとどめておこうとしているにもかかわらず、抽象的なある種の恋愛感情にならざるをえない。『家』の続編である『秋』<sup>(13)</sup>では覚新が小間使いの翠環を妾にしていることからすれば、場合によっては鳴鳳が覚慧の妾になることも不可能ではなかったはずだが、彼らの恋愛はそういう方向性は持っていない。

覚慧が気軽に鳴鳳との対等な恋愛を望み、正式な結婚を口にはしていることは、覚慧と鳴鳳の恋愛の新しいさだが、それ故に鳴鳳にとっては、覚慧への気持ちは、主人への愛として済ますことのできない内向する恋愛感情となる結果になっている。

もうひとつ注目したいのは、鳴鳳が亡くなった主人の大小姐から、小間使いが普通持つ以上の教養を与えられたことである。

「大小姐が生きておられた頃には、よく私に落ち着き先についてお話しになったけど、私の将来の落ち着き先はどこなのかしら。」眼前に広々とした荒野が現れ、明るい所ひとつ見えなかった。あるよく知った顔が眼の前でちらっと動いた。「大小姐がまだ生きておられたら、私のことを気遣ってくれる人もあるのに、大小姐は私に多



くのことを理解するすべを教えて下さったわ。読み書きも教えて下さったし。」(第四章、二五頁)

私には一生でたった三人の人しか居ないんです。一人はお母さんで、一人は大小姐です。大小姐は私に、読み書きと、多くのことを理解するすべを教えて下さいましたし、いつも私を氣遣って下さいました。二人とも死んでしまつて、今は貴方一人しか居ません……(第十章、八七頁)

彼女が奥様に向かって「死んでも馮家には参りません。」と言つた時、彼女は別にこの言葉で奥様を脅した訳ではなく、本当に「死」ということを考えていたのだつた。大小姐が、この「死」ということが薄命な女子の唯一の活路なのだと教えたことがあり、彼女はそれを深く信じていた。(第二十六章、二五五頁)

例えば『紅樓夢』に登場する何人かの侍女もかなり教養があり、しばしば主人の遊びに参加する。ことに賈の御後室付きの侍女鴛鴦などは、主人たちの酒令を取り仕切ることが出来る程である。しかしその教養はあくまで主人を樂しませる為のものであつて、鳴鳳のように「ものごとを理解する」為のものではない。鳴鳳は大小姐の啓蒙を受けて「ものごとを理解するすべ」を身につけたが、それは覚民が「彼女は少しも小間使いらしくない。賢いし、綺麗だし、それに字も知っている。(妾にやられるのは)本当に勿体ない……」(第二十六章、二六一頁)と言つているように、奴隷らしからぬ魅力を作り出すものである。そしてそれが生よりも死を指向するものであることは特に重要である。

鳴鳳が大小姐の啓蒙によつて得た教養は、鳴鳳と覚慧の恋愛を、主人とお氣に入りの小間使いという関係を越えたものにする。そして鳴鳳は、最終的に死を見据えつつ、覚慧との関係が続けることになる。

### 三 鳴鳳の自殺

馮楽山の妾になるよう言い渡されてから自殺するまで、鳴鳳の心理は大きく揺れ動くが、その心理変化の過程は、

時の流れに従って四つの段階に分けることができる。

第一段階は第二十六章冒頭から二五三頁十五行まで。鳴鳳は命令を言い渡す覚慧の継母周氏に、言葉を尽し涙を流してすがりつきながら、命令を撤回してくれるよう三回食い下がる。この訴えは、日頃継子の覚慧にも殆ど母性愛を傾けない周氏の「母性が完全に触発された」(二五二頁)程の効果をあげるが、周氏は結局鳴鳳を退ける。この時の鳴鳳は、「生きるよすがにしていた愛情すらも奪われるのか」(二五〇頁)と恐れていることから分かるように、〈覚慧と別れる〉〈覚慧と別れなくてすむ〉の二つの道を想定し、後者を求めて主人の情けに訴えている。この場合彼女が具体的に求めているのは、小間使いとして一生お館にとどまることである。又〈覚慧と別れる〉は更に、命令通り〈妾になる〉と、命令に従わず〈自殺する〉の二つに分かれている(図A)。

第二段階は二五三頁十六行から二六一頁二行まで。依然として鳴鳳は〈覚慧と別れる〉と〈覚慧と別れなくてすむ〉の後者を求め、今度は覚慧による救いを望んでいる(図B)。覚慧による救いとは、覚慧が以前鳴鳳に仄めかしたところによれば、覚慧が鳴鳳を正妻として迎えることである。ところが「どうしても覚慧と一度話をして苦痛を訴え彼の意見を聞かなければならない。何としても彼と相談しなければいけない。」(二五七頁)と思っているにもかかわらず、鳴鳳は覚慧に話しかけることができない。命令が下った晩の鳴鳳は、覚慧の部屋の下で静かに佇みそっと窓を叩いて「三少爺」と呟くだけである。最後の夜に思い切って覚慧の部屋に入った時も、「三少爺」「お会いしたくて…」「三少爺、少しお話ししたいことが…」「三少爺」の僅か四つの言葉でしか語りかけていない。

鳴鳳が覚慧に話しかけることができないのには二つの理由が考えられる。まず、第一節で述べたように、鳴鳳にとって覚慧は〈救い主〉であり、鳴鳳はその救いを待つ受け身の存在である。危急の時に頼みの綱の覚慧とコミュニケーションがとれないにもかかわらず、鳴鳳は「ますます彼を愛し」(二六三頁)ているが、このことは覚慧が鳴鳳にと

ってやはり別世界の〈救い主〉であることを示している。この場合あくまで覚慧がし手、鳴鳳は受け手であり、鳴鳳にできるのはせいぜい覚慧の前に立って救ってもらえるきっかけをつかもうとすることぐらいである。彼女が語りかけに失敗するのは当然の結果だと言えるだろう。

もうひとつは、覚慧による救いとは正式な結婚を意味しているということである。それは第二節で述べたように、奴隸として望み得る範囲を越えた非現実的なものである。この段階での鳴鳳は奴隸としての分を越えて覚慧に語りかけようとしている訳だが、それが何故実現しないかについては、樋口一葉『この子』の語り手「私」に関する小森陽一氏の指摘が理解に役立つと思われる。『この子』は、夫を深く嫌悪していた若妻が、夫に「お前も此子が可愛いか、ではお前も可愛いな」と言われ、その時の夫の笑顔が子供にそっくりだったという些細な事実から、良妻賢母になる決意をしたという、一人称語りの物語である。氏は、夫への嫌悪の余り出産直後に死産で実家に帰ることすら望んでいた「私」が急に良妻賢母として語るようになったのは、「私」の心理が変化したり「私」が母性を実感したからではなく、「私」が以前の自分はいたらぬ妻であったと語りきることのできる「言葉の制度」を手に入れたからだとした。<sup>(14)</sup>

『この子』の「私」はむしろ心理にかかわりなく夫との不和を解決する「言葉の制度」を見つけることができたが、鳴鳳は反対である。「老黄媽が一度彼女に優しく話しかけたことがあったが、彼女は老黄媽が話し終わらないうちに適当に理由をつけて逃げてしまった。己の分に安んじて運命に従いなさいという類いの言葉を長々と聞かされるのを恐れたのだ。」(二五七頁)とあるように、鳴鳳は奴隸の言説を拒否して覚慧と語り合いたいと思っている。しかし彼女が使っている言説は、「三少爺」という呼びかけから分かるように依然として奴隸のそれである。これでは主人との正式な結婚という奴隸の範囲を越えたことならんについて語ることはできない。鳴鳳は奴隸らしからぬ教養を持っており、一見奴隸の分を越えた事柄について語る力がありそうに思われるが、その教養とは先に述べたように死を「薄命

な女子の唯一の活路」と見なすものであり、言葉を発することには繋がっていない。鳴鳳には新たな「言葉の制度」を得るきっかけがないのである。

第三段階は二六二頁二四行から二六四頁十七行まで。覚慧との会話が成立せず最後の望みを断たれた鳴鳳は、自殺を決意して花園へ行く。〈覚慧と別れる〉〈覚慧と別れなくてすむ〉のうち前者のみが残ったが、それは〈妾になる〉〈自殺する〉の二つに分かれている。この時〈妾になる〉を選ぶことは〈生〉を選ぶことでもあるが、「彼女は生を愛し、全てを愛していたが、生の扉はみな閉ざされており、彼女には墮落の道しか残されていなかった。」(二六四頁)とあるように、生き延びることは即ち墮落を意味する。一方〈自殺する〉つまり〈死〉を選ぶことは、第二段階までは、馮家で覚慧というよすががなしに辛い日々を送るのであれば「そんな生活には未練を感じる価値がない」(二五五頁)という程の意味であったが、第三段階に至って更に積極的な意味を持つようになっていく。

彼女は今度こそ本当に望みが無くなったことを分かっていた。彼女は彼を恨んだりせず、むしろますます愛していた。それに彼女は今も彼が以前と同じように自分を愛してくれていると信じていた。彼女の唇はまだ熱く、そこには彼がつい先程くちづけしたのである。彼女の手はまだ熱く、それは彼がつい先程握ったのである。これが彼の愛を証明している。(第二十六章、二六三頁)

最後にとうとう彼女は慰めを得、男性の汚れない愛を得た、崇拜できる英雄を見つけた。彼女は満足だった。しかし彼の愛も彼女を救うことはできず、むしろ辛い思い出が添えられた。彼の愛はかつて彼女に沢山の美しい夢を見させてくれたが、今は却って彼女を暗黒の淵へと追いやるのである。(同前、二六四頁)

鳴鳳が覚慧に話しかけようとした場面では、象徴的に彼女の言葉の出口を塞いだ覚慧の接吻が、ここでは愛の証明という意味を帯びて鳴鳳を死に追いやる。〈死〉を選ぶことは単に未練を捨てることではなく、覚慧の愛に応えると

いう意味を持ったのである。

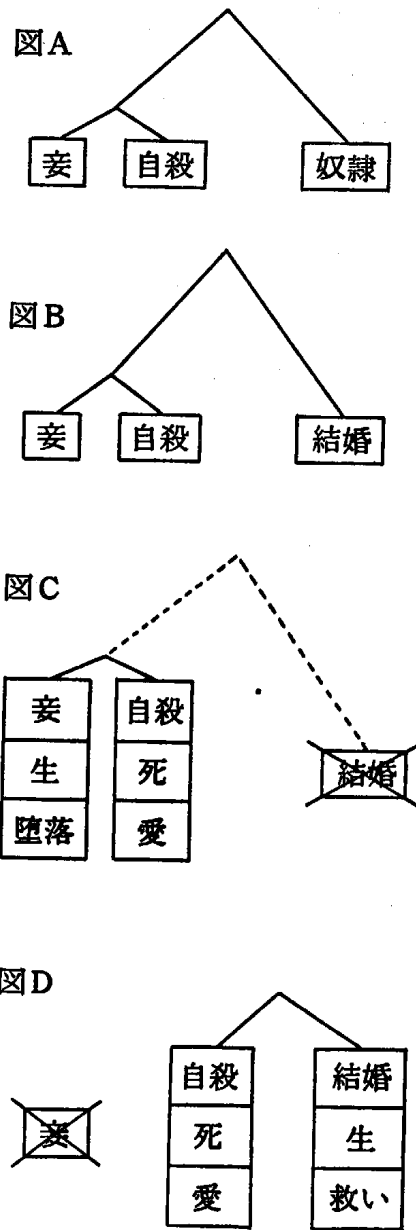
鳴鳳は〈生〉と〈死〉の間で、即ち墮落の道を進むのかそれとも覚慧の愛に応えるのかの間で揺れ動いた末、遂に愛に殉じる決意をする(図C)。

もし鳴鳳がここでそのまま死んでしまったのなら、〈妾になる〉という選択肢を退けて自殺した彼女は反封建の象徴であり、又それだけだとも言えるかもしれない。しかし鳴鳳の心はこの後、それまでとは全く異なるレベルでの選択肢を作り出す。

第四段階は二六四頁十八行から第二十六章末尾まで。一度は死を決意した鳴鳳だが、ふと思い返し、「こんなふう  
に死んでゆく訳にはいかない。あと一度だけでも彼に会って、思いを打ち明ければならない。彼にはまだ自分を  
救う方法があるかもしれない。」(二六四頁)と考える。すでに諦めていたはずの〈覚慧と別れなくてすむ〉という道  
を再び志向するのである。この時点で〈妾になる〉という選択肢を完全に排除していた鳴鳳にとって、〈覚慧と別れ  
なくてすむ〉の対となる選択肢は〈自殺する〉である。〈覚慧と別れなくてすむ〉というのは覚慧に救われるという  
ことで、つまりこの場合の覚慧は鳴鳳の〈救い主〉であるが、〈自殺する〉を鳴鳳が選ぶとすれば、そこに絡んでく  
る覚慧は接吻という愛の証明だけを彼女に与え、救うことはできない存在である。鳴鳳は〈救い主〉である覚慧と愛  
の証明だけを与えてくれる覚慧との間で苦悩するのである(図D)。そしてその結論はこうである。

彼女が彼を引き留める訳にはいかない。彼を妨げることはできない。彼を永遠に自分の側に置いておくことはで  
きないのだ。彼女は彼を捨てなければいけない。彼の存在は彼女のよりずっと重要なのだ。彼女は彼に全てを犠  
牲にして自分を救わせることはできない。彼女は去らなければならない。彼女は彼の生活から永遠に去らなけれ  
ばならない。(同前、二六五頁)

「彼を捨てなければいけない。」と考えた瞬間、鳴鳳は〈覚慧と別れる〉〈覚慧と別れない〉という二項対立から脱却し、彼女の心には、〈救い主〉としての覚慧を愛するの、救ってはくれないが自分を愛してくれる覚慧を愛するの、かという、真に愛情だけにかかわる選択肢が残される。自らの意思で後者を選んだ彼女は、もはや覚慧を〈救い主〉として崇め奉るだけの受け身の存在ではない。池に飛び込む直前鳴鳳は、初めていつもの「三少爺」という呼称の後に「覚慧」という名前を添えて覚慧に呼びかける。ここに於いて鳴鳳の覚慧に対する思いは、救いを求めてものではなく、妾になることへの拒否でもなく、純粹に自身の意思に根差す能動的な行為へと昇華する。



注) /＼は選択肢を、／＼は消滅した選択肢を表す。

最後に鳴鳳の心理から離れて、鳴鳳が自殺の場を選んだ花園という場所について少し述べておきたい。花園にはまず、覚慧と鳴鳳が愛を誓った梅林がある。ここでは主従入り交つての船遊びが催され、幽霊が出るという噂もある。覚新と従妹の梅はここで再会した。老太爺と馮楽山が歓談した場でもある。庭とは建物と建物の狭間に位置する言わば「境界」の地であるが、ここでは主人も奴隷も老いも若きもみな対立を越えて受け入れられ楽しむことができるのである。覚慧と鳴鳳は、鳴鳳が最後に覚慧の部屋に入った時を除いて、いつも窓越しに敷居の上など「境界」の場で

話をしているが、「境界」が空間的広がりを持つこの花園では、二人の間に隔たりは無い。鳴鳳と覚慧の共存の可能性が秘められたこの場が鳴鳳の自殺の地に選ばれたことは、極めて象徴的に感じられる。

### おわりに

こうして鳴鳳は覚慧にささやかなメッセージを発して死んだが、覚慧は鳴鳳の自殺を知ってこう語る。

僕は彼女が水に跳び込む前の心情を考える気になれない。でもどうしても考えなくてはいけないんだ。何故なら僕が彼女を殺したからだ。いや、僕だけじゃない、僕たちのこの家庭が、この社会が殺人犯なんだ。(第二十八章、

二七七頁)

鳴鳳は殺されたと考えることで、覚慧は鳴鳳のメッセージを全く理解しない。鳴鳳の自殺は覚慧にとっては違った意味を持つのだが、それはまた別の物語である。

鳴鳳の心理がこのように揺れ動き、彼女の物語がこのような面持ちで私たちの前に現れたのには、巴金が長年に亘って繰り返し書き換えを行ってきたことが大いに関係している。<sup>(16)</sup>《時報》の『激流』や開明書店の初版と全集版の違いは同じ小説とは思えない程で、興味深い点が多々あるのだが、版の違いに関する考察は今後の課題としたい。

巴金は『真話集』に収められた文章「十年一夢」<sup>(17)</sup>で次のように語っている。

私の「肉体上の奴隷」「精神上の奴隷」という二つの言葉に対する理解は、以前は結局文字面だけにとどまっていた。例えば『家』を書いた時、(中略)、鳴鳳が覚慧と話をしている、覚慧が彼女と結婚したいという時鳴鳳は、だめです、奥様がお許しになりませんかと答え、一生小間使いとして彼に仕えることを望む。これは「精神上の奴隷」を指していたように思う。(中略)。自分の思想が無く、自分の頭を使って考えず、他人が手を挙げれば手を挙げ、

他人がこう言えば自分もこう言い、それも喜んでそうする——これが「精神上的の奴隷」ではないか？これは小説の中の黄媽とは違うし鳴鳳とも違う、彼女たちの自覚は「高」くはないが、彼女たちには自分なりの是非の観念というものがある。

巴金が「自分の頭で考える」という文脈で「精神上的の奴隷」について語り、鳴鳳は今思えばそうではなかったと言う時、私にはまるで、かつては覚慧の分身であった巴金が、六十年余りの時を経て、豊かな心を持つ少女鳴鳳に改めて出会っているかのように感じられる。

注

- (1) 一九三二年四月より三二年五月まで上海『時報』に「激流」の題で連載、一九三三年五月開明書店より『家』と改題して初版。
- (2) 一九九三年十月二十二日東京大学に於ける李存光氏の講演に拠る。
- (3) C.T. Hsia, *A History of Modern Chinese Fiction*, 2nd ed., Yale University Press, 1971.
- (4) 飯塚朗『中国四千年の女たち』(時事通信社一九八三年)より。同書は中国の女性百人余りを題材にしたエッセイ集。
- (5) 陳丹晨『巴金評伝』(花山文芸出版社一九八二年)より。
- (6) 思基「読巴金的《激流》三部曲」(『文学月刊』一九五六年四月号、『巴金專集』江蘇人民出版社一九八二年所収)
- (7) Olga Lang, "Pa Chin's Craftmanship", *Pa Chin and His Writings*, Harvard University Press, 1967, p. 257.
- (8) 巴金「和読者談話《家》」(『収獲』一九五七年創刊号)
- (9) 版本の変遷については龔明德「巴金《家》的修改」(『巴金研究論集』重慶出版社一九八八年所収)に詳しい。
- (10) 張競『恋の中国文明史』(筑摩書房一九九三年)。以下引用は第八章「新しい恋——『紅樓夢』の謎」より。
- (11) 『家』と『紅樓夢』について論じたものとしては、辜也平「《激流三部曲》与《紅樓夢》異同論」(前掲『巴金研究論集』



所収)がある。

(12) 『紅樓夢』第十九回参照。

(13) 一九四〇年四月開明書店初版。

(14) 小森陽一『文体としての物語』(筑摩書房一九八八年)「囚われた言葉／さまよい出す言葉」参照。

(15) 一例を挙げれば、『時報』、開明初版本では、鳴鳳は最後に「覚慧」とは呼びかけず、「三少爺」と言っただけで自殺している。

(16) 立命館大学卒業生鈴木武治氏の卒業論文資料を、参照させていただいた。鈴木氏の資料は全集版の『家』と、新文学大系に収められている開明書店初版の『家』を全編通して対照するという労作で、未発表であるが、多大な示唆を得るものであり、ここに記して謝意を表する。

(17) 『随想録』第三集『真話集』所収。原載は『大公報』一九八一年七月三十日。